

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

2012「中信地区高体連新人戦」

9月14、15の両日、中信地区の高体連新人登山大会が行なわれた。例年、この時期は涼しくなってくるのだが、今年は残暑の中での大会であった。大会は初日、大町市の鷹狩山、南鷹狩山を使ってのオリエンテーリング、2日目は爺ヶ岳への日帰り交流登山を行なった。参加は、男子が6校39名(19チーム)、女子が2校4名(2チーム)。初日の競技は、山岳総合センターを出発し、鷹狩山へ登った後、八坂方面へ下り、唐花見湿原手前から南鷹狩山の南斜面を巻きながら山岳総合センターに戻るといった周回コースでのラインオリエンテーリングの形式で行った。規定時間男子2時間30分、女子は3時間としたが、出場21チーム中、12チーム(男子10、女子2)が規定時間内にゴールした。地形点(読図ポイント)については、1箇所3点とし、15ポイント合計45ポイントで争ったが、大町Bと松本県ヶ丘Aの2チームが満点、松本深志A、Bが42点であった。中信の新人戦ではそのほか設問を課しているのだが、こちらは2地点間の距離、標高差、方位角を求めるといった基本的な問題と地図記号等で10点満点。松本深志Aと池田工業Aの2チームが満点であった。結果、男子は大町Bと松本県ヶ丘Aが98点の同点で優勝、3位には97点の松本深志A、池田工業高校Aが94点で4位となった。

翌日はまずまずの天候の下、7時に登山口を出発し、爺ヶ岳を目指した。3連休初日ということもあり、登山道は大賑わいであった。大北地区の生徒は、中学校のときに爺ヶ岳へ1泊2日で登っているが、今回は日帰り。下山後の生徒の感想の中には、「以前登ったときと違って息切れすることもなく登れ、それほど強くなったことがわかった。」「中学の時仲間と登ったことを思い出しながら歩いたが、この登山でもっと爺ヶ岳が好きになった。」「山頂で中学の時には見られなかった景色をみることができよかった。」「雷鳥を見たことが印象に残った。」などいい思い出作りになったことがうかがえた。

といいながら、普段のテント泊と異なり、センターへの宿泊と言うことで、我が池工



の生徒の何人かは逆に気が抜けた生徒がいて、夜遅くまで起きていたり、結果交流登山に行かないという生徒がいたり、他校に迷惑をかける生徒がいたことは残念であった。日頃の私の指導不足を感じ、反省した。

そんな一幕もあったが、大会そのものは天候にも恵まれ、無事日程を消化。爺ヶ岳山頂では360度の展望とはいかなかったが、ガスの切れ間から時折恥ずかし

げに顔を見せる剣と鹿島槍の姿に生徒たちも満足げであった。

山岳環境を考えるシンポジウム

連休最終日の9月17日、松本市のキッセイ文化ホール(長野県松本文化会館)において、長野県の主催で標記会合が開催された。最初に信大の山岳科学総合研究所所長の鈴木啓助氏の「山岳環境は今」、モンベル会長の辰野勇氏の「山岳環境は今・・・今私達

にできること」という基調講演が行なわれた。鈴木先生は以前からいろいろなところで「温暖化が高山では多雪をもたらすことになる」ということを述べられていたが、具体的な数値を示しながらのその話は、極めて納得のいく話であった。曰く、気温上昇は蒸発量の増加を招くので、降水量の増加の原因となる。都市化の影響で、近年都市では気温が上昇しているが、山の気温が上昇しているということは証明されていない。したがって、都市周辺で増えた水蒸気は山では雪となり、里では雨となる。その総量が増えている以上、高山の雪は増えることになるというのが、先生の説明であった。温暖化が即、雪の量の現象というような単純なものでないという説明は、自然の面白さを伝える興味深いものだった。モンベルの辰野氏の話は、日本人が開発コストに対する金銭的負担には抵抗がないのに、保護コストに対する金銭的負担には慣れていない現状に一石を投じる内容の話だった。つまり、豊かな自然に囲まれている日本人にとって「自然はただ」という発想が今まで普通だったが、これからは受益者負担の視点をもつべきということである。すなわち、企業、国、国民が協力して、関わるすべての受益者がコストを分担し合う時代が来ている。それはモンベルという一企業の会長として得た発想でもあるという。30年後にも生き残れる企業とは、「社会に必要とされていること」と「採算がとれていること」の2面が不可欠であるというのである。・・・一面確かにそれは一理あるがしかし、昨今話題になっている有料トイレの問題や登山道整備の問題、入山料をとることの可否などは、誰を受益者ととらえるかで変わってくる。その点で、視点は間違っていないだろうが、一登山者として考えてみたときには、僕には少し荒っぽい論理に感じられた。

後半は、鈴木先生をコーディネータに、浦野岳孝さん（硫黄岳山荘）、窪田徳右衛門さん（白馬村副村長）、辰野勇さん、山口孝さん（涸沢ヒュッテ）、吉野徳生さん（山と溪谷編集長）、市村敏文さん（県自然保護課）の各氏によるパネルディスカッションが行なわれた。基調講演の中身にも触れながら「登山道の維持管理について」「山小屋トイレの有料化について」「動植物の保全について」などが議論された。トイレ料金については、今年から北アルプス南部と御岳では一回100円の有料化が導入された。山口さんは、100円払うだけの価値のある清潔なトイレを提供している実態を紹介。実際、今年の夏、槍ヶ岳縦走の際、トイレがキレイになっているのを実感した。

僕が大学生時代、常念小屋でバイトしていたころ、今では信じられないことだが、山小屋はもちろん登山道にすらゴミ箱があった。小屋番の毎日の仕事は燕山荘や蝶ヶ岳ヒュッテの弁当の殻が混じるゴミ焼きだった。時には小屋から一の沢の最後の水場のゴミ箱を片付けに行ったものだ。そこは、いつ行ってもゴミがあふれていた。ゴミ箱がなければ、あたりはゴミだらけになるのではというのが、当時の発想だった。だから、ゴミ箱を撤去するというのには一大決心が必要だった。しかし、それは杞憂だった。ちょうど僕が学生を終えるころ、山からゴミ箱が撤去されゴミ持ち帰りが提唱されはじめた。一時的には登山道にゴミが捨てられると言うこともあったが、今ではゴミ持ち帰りが当たり前になっている。山岳環境保護について、パネリストの一人吉野さんからは、山溪が30年以上前からからゴミ持ち帰り袋を山小屋に置いていたということを聞いて、そんな昔話を思い出した。登山道の維持管理や鹿の食害をどう防ぐかなど、今はまだ有効な手立てがないことも、実は身近なちょっとしたことで変わるかもしれない。一人ひとりがどう自然に向き合っていくのかを考えさせられる機会であった。